

明治18年(1855)12月20日高知県土佐郡高知町北門筋(現高知市永国寺町)で生まれる。明治36年3月高知県立中学海南学校を卒業して、高知大林区署に勤務した。この数年間に得た植物の知識は、後日、公園樹木・街路樹を整備するのに役立ったらしい。明治40年10月高知県庁に移り、土木課の配属となった。この時期の土木課に



は、明治10年代の高知県議会で激論の末に起工した四国循環国道開墾・高知港浚渫を、田辺良顕県令の下で遂行した西川寿恵吉がいた。彼の監督指導によって高知公園の整備、県立五台山公園の設立などをしながら、土木技術を習得していった。

大正8年4月都市計画法、市街地建築物法が公布され、高知市にも都市計画調査委員会が設置された。13年11月内務大臣にその適用を申請し、翌年3月適用都市の指定がされた。この法律による土木行政をすすめるために、13年1月高知市土木課長に就き、辣腕を振るうことになる。上・下水道の設備、河川の改修、橋梁の架換、総合運動場の設置などを立案し、着工していった。昭和

16年8月收入役、17年5月企画部長となるが、19年4月依願免職となり、戦時体制下の民間軍需工場に勤務した。

敗戦後、昭和20年8月27日高知市に復職し、建設局長として震災復興事業に着手したが、翌年12月21日に起きた南海大地震によって震災復興事業も加えて、都市計画を立案した。その立案は斬新性をおびただけに、当時の高知市民に即受け入れられるのが困難であり、とりわけ市街中央部を通る「50メートル道路」の敷設では自宅に投石されるほどの反発もあった。二つの復興事業の激務によって、高血圧症に倒れ、昭和24年12月7日専心療養のため退職をやむなくし、29年9月17日69歳で没した。

「清水真澄追悼座談会」で、「お人柄にやはり非常にひかれる点が多うございましてね……」と、歴史学者平尾道雄氏は前置し、「清水さんは旧制中学以上の学歴を持っておられません。それでいて技術面でも、何といえますか、いい意味での深い知識を持っておられたようで、そのためかなり独学せられたじゃないかと思いますが…、いわば非常な努力家だったといえると思います」と讀えている。

今日まで、高知市の都市計画は清水の青写真を基礎にすすめられてきたが、彼はその功を全くみる事がなかった。